



図-68 薬剤散布によるゼニゴケの枯死状況
(キレダー水和剤 500 倍液散布)

1 1 その他

(1) 乾燥 (被害)

スプリンクラー等による自動灌水では、トレイの置き場所や、コンテナ苗の生育状況（成長）によって、散水量が少ない、または散水されていないエリアが生じます。このため、トレイ自体が乾いて、以下のようにコンテナ苗が枯死する例もみられます（[図-69](#)）。



図-69 水分（散水）不足による枯死

凡例：左側：少花粉スギ（直接播種） 右側：少花粉ヒノキ（直接播種）

(対策)

灌水時、トレイ全体にうまく散水されているかどうか、目視で確認するとともに、散水されていない場合には、手散水でも対応できるよう、環境を整えておくことが大切です。

(2) 過 湿

(被 害)

スプリンクラー等による自動灌水では、苗の生育ステージ（季節）により、散水量を調整していく必要があります。特に稚苗段階では、散水過多の場合、コンテナ苗が過湿により枯死する例もみられます（[図-69](#)）。



図-70 水分（散水）過多による枯死

凡例：左側：少花粉スギ（播種） 右側：枯死個体

(対 策)

培地が乾いた時点で散水を実施、または実施しない期間（日、時間）を設ける等の工夫を行います。場合によっては、トレイ重量をチェックし、散水の有無を決定します（[前掲 図-25](#)）。

(3) 薬害等

(被 害)

薬剤散布後、少花粉スギ及びヒノキコンテナ苗の葉先端部が茶色、または白色に変色し、被害が大きい場合、樹勢の低下を招きます（[図-71](#)、[-72](#)）。

(対 策)

薬剤散布量は、規定より、やや少なめにします。また、散布回数の制限も考慮しながら、場合によっては2回に分けて散布を行います。

直接、葉先に当たると、薬害が生じやすい種類もありますので注意してください



図-71 薬害によるヒノキコンテナ苗の樹勢低下事例
(虫害対策用の薬剤使用)



図-72 薬害によるヒノキコンテナの樹勢低下事例
(蘚苔類繁殖対策用の薬剤使用)